

慢性脳血管障害者における心身の障害特性に関する経時的研究

リハビリテーション専門病院の入院・退院時比較

サワ 澤	シュンジ 俊二*	イソ 磯	ヒロヤス 博康 ^{2*}	イサジ 伊佐地	タカシ 隆*	オオナカ 大仲	コウイチ 功一*
ヤスオカ 安岡	トシカズ 利一*	カミオカ 上岡	ユミコ 裕美子*	イワイ 岩井	コウイチ 浩一*	オオタ 大田	ヒトシ 仁史*
ソノダ 園田	シゲル 茂 ^{3*}	ナグモ 南雲	ナオジ 直二 ^{4*}	シマモト 嶋本	タカシ 喬 ^{5*}		

目的 慢性期脳血管障害者における種々の障害の長期間にわたる変化の実態を明らかにする目的で、心身の評価を入院から発病5年までの定期的追跡調査として実施した。調査は継続中であり、今回、慢性脳血管障害者における入院時（発病後平均2.5か月目）および退院時（発病後平均6か月目）の心身の障害特性について述べる。

対象および方法 対象は、リハビリテーション専門病院である茨城県立医療大学附属病院に、平成11年9月から平成12年11月までに初発の脳血管障害で入院した障害が比較的軽度な87人である。その内訳は、男64人、女性23人であり、年齢は42歳から79歳、平均59歳であった。方法は、入院時を起点とした、退院時、発病1年時、2年時、3年時、4年時、5年時の発病5年間の前向きコホート調査である。

結果 入院から退院にかけて運動麻痺機能、一般的知能、痴呆が有意に改善した。また、ADL（日常生活活動）と作業遂行度・作業満足度が有意に改善した。一方、明らかな変化を認めなかったのは、うつ状態であり入退院時とも40%と高かった。また、麻痺手の障害受容度も変化がなく、QOLは低いままであった。逆に、対象者を精神的に支える情緒的支援ネットワークが有意に低下していた。

考察 発病後平均6か月目である退院時における慢性脳血管障害者の特徴として、機能障害、能力低下の改善が認められたものの、うつ状態、QOLは変化がみられず推移し、また、情緒的支援ネットワークは低下したことが挙げられる。したがって、退院後に閉じこもりにつながる可能性が高く、閉じこもりに対する入院中の予防的対策の重要性が示唆された。

Key words : 慢性脳血管障害, 心身機能の障害特性, うつ状態, QOL, コホート研究

* 茨城県立医療大学

^{2*} 筑波大学

^{3*} 藤田保健衛生大学

^{4*} 国立身体障害者リハビリテーションセンター

^{5*} 大阪府立健康科学センター

連絡先：〒300-0394 茨城県稲敷郡阿見町阿見
4669-2 茨城県立医療大学 澤 俊二